

絶望を語る・聞き書きするとは？

岩田 和男

報告者が『荒地』とフクシマを結びつけて考察するきっかけは、愛知学院大学政策科学研究所がおこなった福島県伊達郡川俣町への視察である。その経緯は「Fukushima から『荒地』を読む」で簡単に述べてある。

（略）視察の一員として同行した筆者の頭には‘waste land’が浮かんだ。訳語「荒地」が連想させる「荒れた不毛の地」という意味ではなく、形容詞‘waste’の意味を「人々が住んだり農耕したりできない（“Of land: ...Incapable of habitation or cultivation”）」（略）ととらえた時の、即物的な意味でのそれである。¹

こうして報告者は、Fukushima から眺めることで「人が住めなくなった土地」についての詩として『荒地』を読み直し、あくまで文学・美学的営為の中での出来事として、ディストピア表象の嚆矢という読解を試みた。

しかし、それでは、総合政策的視点、あるいは社会学的視点から捉えた見方、たとえば、ほぼ同じ時期に発表した論文「川俣の女性たち、原発、そして *The Waste Land*」の主旨との間に越えがたい隔たりが生じてしまう。一例を挙げる。報告者は、その論文の中で、2015年2月7日放送のETV特集「住民帰還～福島・楡葉町 模索の日々～」（Eテレ）を紹介して、帰還にむけての活動を開始している早川篤雄さん（室町時代から続く宝鏡寺住職）が、帰還後の見通しを悲観的に語っていることに触れている。早川さんは、「20代から50代までは2%から3%しか戻らないことを重視して、「70代の人」が「11%ぐらい戻る」にしても、「終息行程の30年、40年と言われてる中では、死に絶える」と言う。「僕らの死に絶えると同時に、地域は、ま、消滅、だんだん消滅していく」、そう悲観的に語るほかない胸の内を「空しい思い、空しい感じ」と早川さんは表現している。それを受けて、報告者は、こう述べて論を締めくくった。

もし『荒地』の延長線で Fukushima を考えることに意味があるのであれば、『荒地』が想定しているかもしれない時間は恐ろしく長くてもさほど驚くにはあたらない。そういう言い方だってできるだろう。（略）春と冬のイメージの逆転は、思った以上に意義深いのもかもしれないのだ。問題は20年の間に「冬」を楽しむことができるようになるか、20年をもっと延ばすことができるか、ではないか。比喩的に言えば、「冬」を持続可能にできるかどうか、と言ってもよいように思う、『荒地』を受け継いで。²

言うまでもなく、この結論には大きな問題がある。「冬」を比喩ではなく、現実的方策として「楽しむ」ための提言をすべき社会学的問題意識と相いれないからである。その絶望の深さを思うとき、社会学が『荒地』を引き受けるのは、想像以上に難しい。

本報告は、その乖離をライフ・ライティングと重ねて議論をつないでみることで回避できないかと考えたことに端を発する。したがって、その目的は、その地平を確認し、文学と社会学をつなぐ方法を模索することにある。ちなみに、ライフ・ライティングとは、「自伝、日記、そして個人的な手紙といった類いのもの」に、時代が「新しいあり方での説明を必要とするようになってきている」傾向に注目した、新しい自伝・日記研究である。誰もが書き手になれるポストモダンな時代であるがゆえに、「知の民主化（the democratizing of knowledge）」に触発されたアカデミズムが発見した新しい「時代の不安（the anxieties of the age）」³ 表象研究である。

上に引用した本の編者であるジョリー（Margaretta Jolly）は、ライフ・ライティングという研究分野がどこまでを領域としてカバーするのか、まだまだ未確定であることを強調し、それは、「この『人生／生活を書くこと』というターム自体が人それぞれの人生／生活を書くことをすべて包括するから（because it [the term “life writing” itself] encompasses the writing of one's own or another's life）」（IX）だと述べている。報告者は、この引用に基いて、絶望を書くこと／語ることを同列に置くことの可能性を指摘した。水俣病という社会問題の被害者の話を聞き書きして、その被害者の人生を書き取ったものを優れた文学作品として世に出した先達、石牟礼道子がいるからである。柰太郎少年について江津野家の爺が語り、それを聞き書きした石牟礼の記録を引用する。「柰」とは柰太郎少年、「あねさん」とは石牟礼のこと、「わし」とはその語る爺である。

あねさん、この柰のやつこそ仏さんでござす。

こやつは家族のもんにいっぺんも逆らうちゅうこつがなか。口もひとくちもさけ、めしも自分で食やならん、便所もゆきやならん。それでも目はみえ、耳は人一倍ほげて、魂は底の知れんごて深うごさす。いっぺんくらい、わしどもに逆ろうたり、いやちゅうたり、ひねくれたりしてよかそうなもんじゃが、ただただ、家のもんに心配かけんごと気い使うて、仏さんのごて笑うとりますがな。それじゃなからんば、いかにも悲しかよな眸^めば青々させて、わしどもにやみえんところば、ひとりでいつまっでん見入つとる。これの気持ちがなあ、ひとくちも出しならん。何ば思いよるか、わしやたまらん。⁴

大事なのは、この社会的問題の取り出し方が、必ずしも被害者意識一辺倒で言われているわけでもなければ、聞き取られているわけでもないし、書かれているわけでもないことである。爺と石牟礼でも当然違いがある。温度差はあるものの、どちらも、加害者であるはずの「水俣の会社」(172)を一方的に加害者として断じてはいない。一義的な加害者／被害者の図式で事が断じられているわけではないからこそ、爺が杢太郎のもとを去った母親について語る時も、厳しい現実認識と絶望の深さの不思議な共存が、読む者に深い感動を引き起こさずにはおかない。

杢よ、おまやこの世に母さんちゅうもんを持たんとぞ。かか女の写真な神棚にあげたるが。あそこば拝め。あの石ば拝め。

拝めば神さまとひとつ人じゃけん、お前と一緒にいつもおらす。杢よ、爺やんば、かんにんしてくれい。

(中略)

杢よ、おまや耳と魂は人一倍にほげとる人間に生まれてきたくせ、なんでひとくちもわが胸のうちを、爺やんに語ることがでけんかい。

あねさん、わしやこの杢めが、魂の深か子とおもうばっかりに、この世に通らんムリもグチもこの子にむけて打ちこぼしていうが、五体のかなわぬ毎日しとって、かか女の恋しゅうなかこたあるめえが、こいつめは、じじとばばの、心のうちを見わけて、かか女のことは気ぶりにも、出さんとでござす。

しかし杢よ、おまや母女に頼る気の出れば、この先はまあだ地獄ぞ。(177. 下線引用者)

それは図らずも、チェルノブイリと比較する視点と重なり合う。国家体制の違いもあって、単純な加害者／被害者の構図はとらないものの、『チェルノブイリの祈り—未来の物語』(*Chernobyl's Prayer*)において浮き彫りになるのは放射線の不可視性である。「孤独な人間の声」と題された節で、事故処理作業者の妻であるワレンチナ・チモフェエブナ・パナセビッチは、仲間が死んでいくのを知りつつ症状がどんどん悪くなっていくのを見ることなく感じるだけの夫の姿を、ただ見ているしかない様を「耐えがたいこと (That was something else we had to live with, that waiting.)」⁵と表現するが、その理由は、こんな生／死のありようなど世界中の「だれも知らない (nobody knows what it's like)」からである。「それ」が放射線の不可視性にあることは明らかで、その結果として出来た変わり果てた夫の姿を”turned in front of my eyes into a monster” (Ibid) と表現するところに、東日本大震災の被災記録に散見される津波の不可視性と比較することができるかもしれない。

さて問題は、川俣町山木屋地区復興調査の結果故郷に戻らない／戻れないと決めた人々の声であるが、これについては目下調査中で、絶望との関わりを語るには至らなかった。

注

¹ 鈴木俊次・滝川睦・平林美都子・山口均編『英米文学における父の諸変奏—安田章一郎先生百寿記念論集—』(英宝社、2016年)、277。

² 『政策科学』第6号(愛知学院大学政策科学研究所、2015年3月)、64。

³ Margaretta Jolly, “EDITOR'S NOTE: Aims, Scope, and Selection of Entries,” Margaretta Jolly ed., *Encyclopedia of Life Writing: Autobiographical and Biographical Forms. A-J* (Routledge, 2001), IX. なお、訳出は拙訳。

⁴ 石牟礼道子『苦海浄土』(藤原書店、2016年)、163。以下、本書からの引用は本文括弧内に示す。

⁵ Svetlana Alexievich, *Chernobyl's Prayer*, 1997; Penguin Modern Classics (2016), 285。スベトラーナ・アレクシエービッチ、松本妙子訳『チェルノブイリの祈り—未来の物語』(岩波書店、1998年；2011年)、275-76。以下、本書からの引用は本文括弧内に示す。